
護法鬼奇談

タキツチヨス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

護法鬼奇談

【Nコード】

N09410

【作者名】

タキツチヨス

【あらすじ】

江戸時代のいつか、山深いどこかの里に起きた悲劇と、ささやかな奇跡の結末。昔語りをしよう、今はもう人ではなくなった者たちの、誰も知るもののない、おとぎばなしを。

起

麓の村には、有るはずの無い灯火が群れていた。

山頂からは、その灯、松明の炎が、徐々にこの山裾へと、這い登ってくる様までがはつきりと見取れた。

さえざえと空気の澄み渡る夜空に、雲間から覗く星は痛々しいほどげざやかだ。雪こそまだ降ってはこないが、それも程なく、この辺りを真綿のように包んでゆくだろう。

「御坊、追手が迫っております。いま少し、足を早めねばなりませんまい」

それまでも必死で木立の間を歩いていた人々は、しかし、男の言葉に反して愕然と歩みを止めた。

「お終えだ……」

「やや子もおじいおばあもいて、これ以上は早く進めねえよ」

「死んでもいいだ、おらたちは極楽さいくだで、怖いこたあねえ」

二、三十人程の彼らは、一目で百姓と知れた。乳飲み子を抱えた女もいれば、歩くのもやつとの老人もいる。麓の村人全員が、今、里山伝いにおちのびようとしていたのだ。

淫祠邪教の村と、幕府に知れたからである。

邪教の名は真言立川流という。

山狩りを知らせた男は、彼らとははつきりと異なる雰囲気を持っていた。

ずば抜けた長身に逞しい体つきも異質だが、何よりも、男の物腰

は武士のそれだ。村人同様、着の身着のままのボ口を纏っているが、その腰には、随分とこの一群には不釣り合いな剣が鞘も無く、剥き出しのまま具されている。

刀ではない。両刃の剣だ。

三鈷剣、と密教では呼ばれる法具である。刃こそ潰してあるが実用に耐えうる大きさにつくられたそれが、帯がわりに締めた荒縄に差し込んである。

「まこと、無常……我等が、幕府に何の叛心あるといわんや」

人々の中心にいた、僧形の老人が、絞り出すように呟いた。即身仏かと思紛うほど皮膚は皺ばみ、痩せこけていたが、柔和な眼差しは涙に濡れていた。

「将月、そなた、村の者を率いて逃げよ。このまま尾根伝いに、国境の峰に紛れるのだ。その辺りに住まいする山人に助力をあおぎ、皆を守ってやってほしい」

「御坊はいかなさるのです」

尋ねたのは、将月のそばにひっそりと控えていた美女だった。やはり見すばらしい百姓女の服を纏っているが、これも、武家の出と知れる。

「儂は、お上のもとへいこうと思うとる」

干からびた手は、今や刻々と迫ってくる灯火の列を指した。

「いけません、お上人様！」

「お上人様を見捨てて、おらたちだけ逃げるなんてとんでもねえ！」

「たとえ、御坊が行かれても、役人は百姓衆を狩るでしょう。村を捨てたは、年貢を納めぬと同義。一揆よりもきついお仕置きになるは必定」

「わかつておる、麗月。だから、お前たちは早く逃げなさい。この皺首一つ、些少の時間稼ぎにはなってみせようよ」

麗月と呼ばれた女は、将月を見上げた。

「兄上……」

将月は静かに頷いた。座り込んでしまった村人たちに向かって、

「捨吉」

「へい！」

弾かれたように、百姓の一人が立ち上がった。まだ若い。二十は超えていないだろう。彼の足元には彼によく似た小さな女の子がいて、親指をしゃぶりながら、緊張した面持ちの父を不思議そうに眺めている。

「皆と御坊をつれて、急ぎ尾根へ抜ける。お前はよく鹿を獲っていたから、山には慣れているよう　我等はここで、役人達をくい止める」

「ならん、将月、麗月！　命を粗末にするは、わが教えのもつとも忌むところぞ！」

「よく存じております。ですから、我等がいくのです」
泰然と微笑む将月のとなり、麗月が寄り添う。

「御坊が生きておいでなら、その教えに従い、子殺し子捨てをするものも減りましょう。我等は、その命の行く末を、守りとうござる」
脱力していた村人たちが、一人、二人と立ち上がる。

「御坊を頼んだぞ、捨吉。皆も、達者でな」

「将月様、麗月様、ご無理をしてはなんねえだよ」

「きつときつと追いついてくださいませ、おらたち、ずっとお待ち申しております」

死の絶望と恐怖に、一縷の希望が打ち勝つ。

村人たちは、子を抱き直し、老いたものを支え、再び歩き始めた。佇んだまま、その場から動こうとしない老僧を、捨吉が促す。

「上人様、将月様たちのお志しを無にしてみはなんねえだ。な」

「将月……麗月……お前たちも、清月と同じ修羅道を行くか」

「天も人も修羅も同じ六道のなかと、お教えになったは御坊でござるよ」

木立を縫う夜風にのって、殺気だった人の気配が伝わってくる。

麗月が、腰に下げた袋から、金の鈴を取り出した。五鈴。やはり法具だ。

「兄上、山の反対に廻りましょう。そこで、これを鳴らせば、少しは」

「うむ。……御坊、剣と鈴は済みませぬが、我等がお預かり申す。御免」

兄妹は、もはや振り返りもしない。新月の木立の闇に、下草を踏む音も程なく消える。

「無常よ……」

その闇に、老僧は深く頭を垂れ、合掌した。

「追手の数は、たいして減ってはおらぬようですね」

「……そうだな」

星明りも、生い茂った林の中には届かぬ。真闇に近い山の斜面を、ほとんど手さぐりで、武士の兄妹は互いを気遣いながら、横切っていく。

「清月も、では」

「もとより、生き長らえるとは、思っではいなかったろう」

闇に紛れてはいるが、多分麗月は、顔をしかめている。

「御坊や、兄上に逆らって、大口をたたいておきながら、さして役にも立たぬとは。我が半身ながら、うらはは情けのうございます」

うらら、と得度前の己の名を口にして、あ、と麗月が声を詰まらせる。

「今は、麗月でございました」

「気にするな。清月も、村の者や、御坊を案じていればこそ、

あの様な言いようをしたのだ。文句は、三途の川を渡ったあとで、好きなだけ本人に言えばよい」

「そうですわね」

さばさばとした口調で、麗月は、五鈷鈴をりん、と鳴らした。

りん。りん。

訝し、朗々とその音が山に響きわたる。

「畜生腹の犬同士、きつとあの世でも咬み付き合うのが定め」

「そういうな。私には、二人とも大切な妹と弟だのに」

将月は苦笑している。双子に生まれ、共に世間から疎まれた分、姉弟の絆が深まっても良さそうなもののだが、この妹と、恐らくはもう命の無い弟は、物心付く前から仲が悪かった。

「あやつが先に待っているとなると、私は後生でもお前たちの仲裁をせねばならんな」

「兄上に御迷惑は懸けません」

りん。

「それくらいなら、清月をひきずって、紅蓮黒縄に参ります」
気丈な妹。闇の中で、つないだ手は、それでも震えている。

り、りん。りん。りん。

武士だろうが、百姓だろうが、死は怖い。それが当たり前なのだよ。

老僧の声が、耳に蘇る。

なんの違いもない。生まれ方も、死に方も、人は皆同じだ。

御仏の教えの前に、身分も、財産も、ない。命は、どんなものでも、生まれてきたことがすでに尊いのだ。命を成すことも、だから慈しまねなければならないのだよ。

それは、畜生腹とさげすまれた双子の弟妹を救う光だった。武士の格式にとらわれていた将月を救う光だった。

そうした光で、導かれ、救われる者が、もつとおればよい。そのために、我等兄妹が礎になろう。まだ生まれぬ、救われぬ魂よ、生きよ。

ふいに、木立の彼方が、赤く染まった。

御用だ、召し取れ、の声が間近に迫っていた。

「兄上、清月に見せてやりましょう。私は、誓って殺生は致しません」

「己の命にも、それを誓いなさい、麗月。無駄に捨てて良い命はない」

腰の三鈷剣を、将月は抜いた。刃の無い剣は、しかしもとは彼の愛刀を鑄潰した鋼でできていた。

「形は変われど、結局、最期もこれと一緒にとは、武士の因果か……」
取り囲む炎、それに照り映える白刃の輝き。

「行くぞ」

「はい」

闇の中から、光の中へ、そうして二人は進み出る。

「邪教の守り手はこれなるぞ」

堂々と名乗った将月の声を、怒号がかき消した。

承

将月達が立ち去ったばかりの村へ、時は戻る。かわたれ時には少し早い、人気の無い村には、すでに血臭が漂っていた。

「ひいつ、ひいつ」

貧相な村のたたずまいとは対照的に、贅を凝らした屋敷の周辺である。立派な構えの表門から、累々と、死体が転がっているのだ。死体は、農村には似つかわしくない、やくざ者の風体ばかりであった。

「庄屋あ、おめえだよなあ、代官にある事無い事吹き込んだのはよ」
脂ぎった小男は、奥座敷に追い詰められ、ガタガタと震えて声も出せぬ。

切り取られたのはまだ片耳だけだから、声は聞こえていようし、口もきけるはずなのだが。

問うた男は、黒っぽい古着を着流しにした浪人の体だ。鋭く切れ上がった目つきは、将月や麗月に似かよったところがある。全身に返り血を浴び、薄笑いを浮かべた様は、悪鬼さながらの凶相であった。

「そりゃあ、坊さんは立川流さ。けどな、その坊さんが、荒れ寺も墓場もきれいにしてよ。寺子屋の真似事から、病人や怪我人の面倒までみてたんじゃねえか。そのお人を、なんだって村長のお前さんが売りやる？ 頭下げるのが普通だろう」

「む、娘たちを売るのを、邪魔したじゃあないか、あの人は」

猿のように歯を剥いて、ようやく庄屋は声を出した。

「あ、あんたたちに命じて、みんな連れ戻しちゃった。それじゃあ村の連中の、迷惑だった、から、こ、子供もまびかねえようになっちまったていうのに、」

「親が泣いて売った娘らの代金に、びた銭しかよこさねえで、なに言ってやがる」

それまで肩に担ぐように構えていた刀を、ひょいと清月は　　そう、この男が清月だ　　無造作に降り下ろした。

庄屋の左足の親指が、ぶつんと飛んだ。

「ひいひい」

「売った金の八割は、お前が懐にいられたたろうが。おまけに娘ら、お前と、女衞の子飼いがさんざ遊んでから、売られていく。店に着いた時には、みんなおかしくなってるそうだが、知ってたか？」
ごん。

今度は、足首が濡れ縁から庭へと転げ落ちた。

「あ、あんたは知らないんだ、都で立川流といえば、そりゃあ恐ろしい、死体から骨を取り、行のさなかでできた赤子も殺す、畜生の集団……」

「そんなえげつねえ行に狂ってんのは、金も暇もある馬鹿野郎どもだけだぜ」

返り血に染まっているが、ひどく生真面目な表情が清月の顔に浮かぶ。

「立川流っていったって、あの坊さんは髑髏拝めの、見境なくまぐわえの、そういう事はいわねえ。まぐわって、できた赤ん坊こそが赤白二淳の本尊なり、てのがお題目なんだからよ。そこの生臭坊主より、よほど筋が通ってらあ。てめえも、説教を聞いてただろうが、こら」

「邪教は邪教だ！　きりしたんにも劣る外道……」

「うるせえなあ」

少々勢いをつけた切っ先で、清月は庄屋の顔を右横にないだ。

庄屋の口の左端が、耳の下まで一直線に裂け、歯列がのぞけた。

「ああああ」

悲鳴がもう声にもならない。庄屋の腰の辺りがぐつしよりと濡れそぼち、さらに脱糞の臭いが漂い始める。

「第一、坊さんのせがれはもうお役御免よ。村の女に手エだそうにも、せがれがたたなきや悪さもできめえが」

からからと、血塗れた刀をひっさげたまま清月は邪気なく笑った。「もつとも、勃ったところで、やっぱりはださねえだろうがな。」

明妃はこの世でただ一人の結縁と成す、だとよ。女房もいねえ俺にや、わからねえがな」

庄屋はもうその声を聞いていない。白目を向き、口から血と涎をないまぜに嘔きこぼして失神していた。

「けっ」

つまらなそうに吐き捨て、懐の手拭いで刀身をぬぐう。人脂に曇りきった刀は、なまくらよりも役立ちそうも無かった。

「十人斬って、このざまか。……二本……いや、三本は要るな。役人から獲りながら、代えていくしか……」

「清月さん、いなさるか」

彼を呼ぶ声と共に、数人の足音が、屋敷の中に踏み込んでくる。

「清さん、……庄屋さんも殺したただか」

来たのは、村の若い衆が五人だった。とうに旅立ったはずの彼らを見て、清月は面食らう。

「こんな爺い、殺すまでもねえ。……なんで、お前達、まだ村にいやがるんだ」

「おらたちも、役人と戦うだよ」

「馬鹿かおめえら。やっとうに触ったこともねえくせに」

「代官所の捕手相手に、一人でかみつこうってあんた様の方が馬鹿だよ」

笑って、その内の一人が言い返す。やくざ達の屍を見、庄屋の有り様をみていながら、残りの者たちも怯えてはいない。それなりに胆の座った男たちであるようだ。

「うるせえな、斬るぞこら。邪魔だ邪魔だ、とつと兄者たちを追え。まだ間に合う」

ぶんぶんと、棒切れで犬を追ひ払うように刀を振り回し、そのま

ま清月は屋敷を出、村の入り口に向かった。その後を、それこそ懐いた犬のように、若者達がついていく。

「おらの嬢は、代官所の役人に、貢がれただよ。首くくって、死んだ」

「おらのいいなづけだったおさとも」

「上人さまには悪いが、おらたちは、地獄に落ちてもええ。ええんですよ」

「庄屋さんの悪行に目エつぶってた役人に、一泡吹かせてやりてえんですよ」

「ああ、うるせえうるせえ。好きにしゃがれ、どうでてめえの命だ」
険悪な顔つきの清月とは反対に、若者たちの顔が明るく晴れる。

「竹を切ってきますだ」

「おらたちは、役人の動きを見て来ます」

生き生きと、死に向かう彼らを、苦い顔つきで清月は眺めていた。喧嘩は好きだが、戦は嫌だ。自分が自分で無くなつて、大きな流れに飲み込まれる。

「関が原じゃねえんだ」

武士は己ひとり。無辜の農民を己という流れに巻き込んで、それでいいものか

「なにが いい ものですか」

さらに一刻前、古寺のなかでそう麗月とやりあつたばかりだ。

「無闇に死ぬ事はならぬと御坊の教え、やはりお前にはわからぬか」

「うるせえ。子供と年寄りつれてちや、いかにいますぐ発つたところで、必ず追いつかれる。俺が勝手に居残るんだ、いいも悪いも、言われたかねえ」

「逃げきれなければ、その時のことだ。無事に落ち延びる事ができれば、無益な殺生をせずに済む。役人といえども、同じ人間だ。争いたくはない」

急な旅立ちにわき返る村の騒ぎを聴きながら、将月も険しい表情

で弟を見つめる。

「それでも、共に来てはくれぬのか、清月……」
「聞けねえよ、兄者。それだけは」

兄は、憧れの全てだった。度量も剣の腕前も、兄には及ばない。なにより、家名をすててまで、妾腹の、しかも双子の自分たちを守ってくれた兄。

畜生腹を口実に、弱小武家の母の実家を潰すことが決まった時、そして、自分たちも亡き者になると決まった時に、将月は命を下した藩主を、斬った。人間として尊敬できるところは何一つ無い男だったが、それでも将月は苦しんだだろう。

実の父親を殺したのだから。

放浪のなかで、かの老僧と会わねば、追手をまたずとも割腹していたに違いないのだ。

老僧は、双子にとっても、父であり、祖父のようなものだった。立川流という名の禍々しさからはかけ離れて、僧の説く教えは明快で、濁ったところが何一つない。だからこそ、この何も無い貧しい村で、彼らは歓待された。

やせた土地に、蕎麦や稗をほそぼそとつくりながらも、終の住処を見つけたと安んじていたものを

「なにもして無い者が、なんで追われなきゃならねえ。俺は逃げるなんざまっぴらだね」

「ことを荒立てても、村の者が迷惑するだけだ。だからこそ、私たちが彼らを守らずしてどうする」

「代官所の木っ端役人如き、俺一人で片づけてやるさ。そうしたら、のんびり荷造りに帰ってくればいい」

「一人でかなう訳ないでしょう、この馬鹿！」

「お前の憎まれ口も、聞かなくてすむは清々だぜ、うらら
そういつて、清月は立ち上がる。

「御坊には、よろしく言つといてくれ。どうせ、顔をみせたら説教垂れるに決まつてるからな。……あとは頼んだぜ、兄者、うらら」

「清月、どうしても残るか……」

「どうしてもだ。それにもう一つ、俺はどうしても庄屋に挨拶しておかなきゃあ、気が済まねえんだよ」

昼になって、役人が来る事を知らせた庄屋。村一つあずかる身でありながら、金と女を鼻薬に、おとがめもないそうだ。

したり顔で、村人たちを罵った顔を思い浮かべると、清月のはらわたしは煮えくりかえる。

「ああ、それから、こいつを借りてくぜ」

そういつて、清月が懷から取り出したのは、黒い独鈷杵だ。

黒曜石の刃を、銀の金で接いである。独鈷としては異常な造りだ。

「お前、それは……」

「兄者の刀のかけらぐらい、縁起かつぎで持っていってもいいだろう？」

「兄上、私からもお願いします」

珍しく、うららが清月の肩を持つ。清月が、明らかに老僧のもとから盗んだと知っているはずなのに。

「じゃあな」

わざとつつけんどんに、今生の別れを告げる。

兄は、何も言わなかった。うららも、又。

だが無言のうちに、清月を案じる気配がひしひしと伝わる。それを踏みにじって、背を向けたのだ。

村人に声をかけ、その足で、庄屋の屋敷を守っていたやくざとやり合った。

もう、あとには引けない。否、引かぬ。

（極楽なんざ、俺には氣ぶつせいだ）

砥石のかけらで、血曇りを削り落とすようにして、刀を研ぎ上げながら、清月はそう思う。

無銘の刀だが、今日初めて人を斬った感触では、業物かもしれない。素人の無茶な研ぎ方で、今は見る影も無いが。

兄は、名刀をおしげも無く寄進し、仏具の材として潰したが、清月は刀を手放せなかった。逆に、兄の刀が造り変えられていくのが口惜しかった。鍛冶の男に頼んで、鋼のかけらを取りおいてもらい、山で拾った黒曜石を刃にすえて、独鉗を作らせた。刃の分まで、鋼は無かったからだ。

（荒々しき形よの……）

僧は、清月の苛立ちや迷いを、そこから感じていたようだった。刀を捨てられぬ己、百姓に馴染めぬ己。兄を慕いながら、兄の諭す通りに生きられぬ己の。清月から献じられた独鉗は深く僧侶の懷にしまわれたが、勤行に使われる事はなかった。

その独鉗が、今は清月本人の懷にある。

（俺に出来ることといったら、人斬りしかねえやな）

あぐらをかいた清月のそばでは、二人の若者が竹の先に油を塗り、火で炙る作業に余念が無い。こうすることで、斜めにそいだ竹の切っ先は固く強くなる。たまに、もう一人が道の脇から現れて、その竹を数本抱えては、また藪の中に消えていく。

偵察に行った二人が、何やら細工をしているようだ。

（まあ、好きにするがいいや）

宵闇の迫るなかで、竹を焼く炎だけが明るい。

道の彼方に人影を見とがめて、清月は立ち上がった。なにかを叫びながら来るそれは、偵察にいていた百姓の一人だった。

「清さん、来た。来たよ」

息を切らしながら、ようよう、それを告げる。

「代官まで直々のお出ましたよ、結構な数だ」

「よし。じゃあ、おめえらは逃げな。斬り合い、殺し合いは侍の仕事だ。百姓は、お呼びじゃねえよ」

「まだ、そんなこといつてらあ」

意外にも、おらかな笑い声が、若者たちから上がった。

「罾をつくるのは、百姓のほうが上手いですよ」

「罾だ？」

「忘れちまったんですかい？ 先に行ったよし松は、猪罾の手練じやあねえですか」

「あ……おめえら、それで……」

「もし、村の衆が戻ってこられるなら、村はそのまま残してえです」

「人死には、村の外にしましゅうや、清さん」

「お、おう」

立場が逆転している。自分一人で、と気張っていたが、覚悟は百姓たちの方がよほど出来ている。すでに走り出した彼らに肩を並べながら、

「ちえ、いいとこなしたな、俺ア」

「清さんは、お侍だから。ほんとは、清さんには、将月様たちと一緒に、逃げてほしかったですよ」

「何？」

「これは、おらたち百姓の戦だ。おらたちに生きる力を授けてくださった上人様や、娘っ子達を取り返してきてくれた清さんたちを巻き込んで、あ、罰があたりまさ」

「昼に庄屋の話を聞いた時から、おらたち、お上に逆らう覚悟ができてたですよ」

また、笑い。

「なのに清さん、一人で庄屋をとつちめちまって」

「うるせえな」

こんなにも、人間は死を前に明るく笑えるものか。陰りの無い笑いだ。

この若者たちを死なせたくない、清月は心から思う。

「無駄に死ぬな。いけねえとおもったら、さつさと逃げちまえ。戦は、百姓の仕事じゃねえ。百姓は畑と子供こさえてりゃいいんだよ、まったくこの馬鹿どもがよ」

「口の悪いのは、死んでもなおらねえな、清さんは」
「うるせえな」

道の脇から、よし松が手を振って、合図していた。清月達も、同じ道端の藪の中に身を潜める。

「道の真ん中に、穴を掘ってあります」

「急拵えで、あんまり深くはありませんがね、竹をいけておきましたから」

目を凝らすと、確かに指さされた辺りに、柴が散らばり、土が乱れていた。薄闇でも、地面と見分けがつきにくい。

西の空には、わずかに赤みが残っているが、それも間もなく消えるだろう。

夜が来る。

「いい塩梅だぜ」

舌なめずりをして、清月は刀の柄を握りしめた。

転

「猪はよくても人間はでかいんだ、馬鹿野郎……測つとけ」

ひゅう、ひゅう、と鳴る自分の息がうるさい。

「まったく……二、三人しかひつかからないじゃねえか、よし公……」

捕り方は、減ったようにはまるで見えなかった。清月のまわりを取り囲む十人ほどを残し、代官と捕手たちは、何事も無かったかのように、村へと行進していく。もはや、留めようはなかった。

松明に輝く槍の切っ先が、あやかしの目のように、清月を睨む。

刀で斬りあう愚を、彼らは犯さなかった。

「二十……は、やったと、思ったんだがな……」

刀を支えに、ようやく清月は立っている。せめて最期の一足掻きでもしたいのだが、右手だけで構えるには、鋼の棒はもう重過ぎた。かといって左手を腹から離せば、臍物が傷からあふれだす。

「構ええっ」

この隊の頭らしい役人が叫ぶ。
すうつと、あやかしが十の目を閉じた。

「ちえっ……兄者たちに、あの世で会わす顔がねえ、な……」

若者たちはどうしただろう。うまく、逃げ延びていればいいが。
「突けえっ！」

槍が、一斉に繰り出された。

振動と鈍い音が体の中から響いたが、痛みはもう感じない。

自分の腹や胸に、けら首の根元まで埋まった穂先が、何かの冗談のようだ。

懷から、ちん、と澄んだ音をたてて、独鈷が落ちた。

「兄者……すまねえ……」

独鈷を追う視線の先、すぐ足元に見知った顔が転がっていた。百姓相手には刀を使ったのだろう。胴体は見当たらない。

見当たらない。

もう、視界が暗くて、何も見えなくなっていく。

夜がきたのだ。

「……無駄死にすんなって、いったろ……」

ねじるように槍が引き抜かれる。

清月は、砂を詰めた袋のように地面に崩れ落ちた。

夜はくる。

侍の屍の上にも、百姓の屍の上にも。

その匂いに気付いたときにはもう、麗月はそれを浴びていてた。

「兄上、油です！ 離れて……！」

言い終わらぬ内に、松明が投げつけられた。

一気に闇が晴れた。

人の形に芯をみせて、赤々と炎が燃え上がる。

「麗月ッ！」

「あ、にう、え、……」

己に火が燃え移るのも構わず、将月は兄を案じて身を離そうとする妹を、抱き留めた。

「酷いと思う心も無いのか、おぬしらは……」

食いしばった歯の根から、絞り出すように将月はうめいた。

捕手の半数以上が、憑き物が落ちたかのように、動きを止めていた。

切り合い、殺し合いは、すでに村境で見聞きした。しかし、相手が狂信の徒であるとはいえ、女が焼け焦げていく様は、さすがに吐き気を催させる。

この在では、まだ打ち首も火炙りも行われておらぬ。役人たちといえど、そうそう死罪にはでくわさない。

それに、罫を仕掛け、不意打ちをかけてきた侍には随分と同僚が殺されはしたが、この男女の邪教徒は、決して彼らを殺そうとはしていなかったのだ。

男の持つ異形の剣に刃はなく、なおかつ足払いや、小手のみを男は狙っていた。

女にしても、目ざましい俊敏さで捕り方の一人から刀を奪いはしたが、彼女もまた、峰うちに専念していたのである。

「邪教の徒は、人に非ず。獣が道理を説くとは笑止！」

言い切ったのは、良く肥えた代官本人であった。

「そのけだもの風情が、ひとがましいことを申すな。ぬしらのせいで、村の者が死ぬぞ？ わしとて、村の娘たちは惜しいわい、もつたいたい事をしてくれたの」

「女衛と通じておったは、代官、うぬ本人であつたか……」

夜風が、消えかけていた麗月の炎を将月の衣服に移し、再び光が煌々と闇を照らした。

「我等は、人心を乱す行いのひとつだにしてはおらぬ。欲に目が眩

み、詮議もおろそかに無辜の村人を狩りたてて、うぬのほうが鬼畜であろうがッ！」

否、炎ではなく、男の気迫が闇を退ける。

俱利伽藍の剣を携え、迦楼羅炎をまとうその姿を、彼らは知っていた。

「不動明王……」

誰からとも無く、呟きは広がる。

呟きは、さざ波のように名号を唱える声に変わっていった。

「何をしておる貴様ら、外道に手をあわせてなにするかッ！」

焼けただれた麗月には、まだ息があつた。ふらりと将月の腕を離れる。

何か言おうとして、将月は言葉を呑んだ。ただれたその顔が、笑つたように見えたからだ。

「な、何……？」

焼け焦げた女が、代官に向かつて、歩いてくる。

「女好きの、代官殿」

炭色の唇は、はつきりと言葉を紡いだ。

「好きなものと滅ぶは、本望でありましょう……？」

麗月が代官に抱きつくのと、その手が呆然としていた捕手の松明を奪うのは、ほとんど同時だった。

「地獄に、私がお供つかまつります」

「は、はなせ、離せえ！ 何を見ておる、この化け物を引つ剥がせ！ は、早く、」

燃え盛る松明を代官の懷にねじ込み、それを己の体でふさぐようにして、麗月は代官を抱きしめる。懷紙に燃え移った炎は、薄衣のように代官を包み込み始めた。

「兄上 誓いを破るうららを、お許しくださいまし」

誰も何もすることが出来ぬまま、火達磨の代官を抱え、麗月は濃

闇へ身を踊らせた。

その先には、沢へと落ち込む崖がある。

身じろぎもせず、体も焼かれるにまかせ、将月は凝然と、その闇を見つめていたが

「麗月、清月　お前たちばかり、無間にやるわけにもいくまい」
将月は、捕手達に向き直った。

誰も何も言わぬ。

代官の耳障りな悲鳴が止むと、しんと、静寂のみがあつた。

「こ度の罪は、皆、我に帰せられよ。村の者を惑わし、代官殿弑せし罪、この将月が全て引き受ける。ご一同、異存は有るまいか」
捕手全員が、刀を収めた。村人を追わぬと、その誓いでもあつた。
「では、御免」

言うなり、将月は剣の切っ先を己の胸に押し込んだ。

なまくらのはずの刃が、ためらいのないすさまじい膂力で、背にまで突き抜ける。

即死であつた。

結

「しょうにんさま、星がふってくる」

恐怖で縛られていた村人たちの耳に、無邪気な子供の声が響いた。
「星……？」

ちらちらと、冷たく、はらりと頬をかすめておちるもの。

急ごしらえのがんどうの灯りの中に、白く、白く。

「お空に星がのうなつて、ほら、降ってくるよ」

晴れ渡っていた夜空は、いつしか重みのある闇にとって変わっていた。その空から。

「雪じゃ……」

「もう、降り始めおった」

一段と、寒さが増したように皆には思えた。楽しげに、木々の枝の隙間からこぼれるそれを追うのは、子供たちだけだ。

「将月様たち、どうなったかの……」

「でも、追手もこないようだよ。うまくまきなさったんじゃないかねえ」

「迷わず、追いついて来られるといいがの……」

大人たちのひそひそ声などどこ吹く風と、寒さも、恐怖も、子供たちにはまだ遠い。

雪、雪、と笑い声が響く。

ふいに、その子供たちがおし黙った。何かに、一心に耳を傾けるかのように。

そして、か黒い森の彼方を、一斉に見つめた。

「りんの音だ」

「うん」

「りんの音がする」

大人たちは顔を見合わせた。何の音も、彼らには聞こえない。

「ほら、また」

「うん、おいでおいでって」

一瞬顔を見合せ、きららかな笑い声をあげて、子供たちは我先に駆けだした。

「あっちだね！」

「うん、あっちだよ！」

「これ、行くな！ この闇、この山で迷うたら、死ぬぞ！」

あわてて捨吉が子供たちを追った。子供たちは、何かを目指している。何かの声を聞いている。だが、それが何であるかは、捨吉にも、他の者にも、聞こえず、見えない。

「すだまこだまの悪さじゃ！」

「山の化け物に、おふみたちがたぶらかされたよう！」

おろおろと、大人たちも必死で子供たちを追いかけた。老僧にも、一体何が起こっているかはわからない。ただ、ほんのかすかではあるが、彼もまた、その音を聞いた。

りん。

闇の中を、子供たちは軽やかに木の根を飛び越え、枝をすり抜け、駆けていく。

足をとられ、下枝に顔を打たれながら、そのあとを大人たちがようつ追う。

「おふみイ」

「松坊、留吉イ、どこにいくだあ」

りん。

「上人さま、大丈夫だか。おらがおぶうていきますだ、さあ」

「あ、ああ、大丈夫。大丈夫だ、お前も、子供たちを追いなさい」

気づかう若者の申し出を断り、妙に軽く感じる杖で、彼も必死で足を早める。僧には、ききなれた音であつた。勤行のたびに、その手に振っていたものの音だつた。

もはや捨吉も、山での指図どころではない。なのに、誰一人、崖や沢に落ちる事も無く、夜の山を走っているのだつた。そんな体力も注意力も、誰にも有るはずが無い。床についていた年寄りも混じっているのだ。なのに、無尽蔵の活力が、彼らを満たしていた。彼ら自身も、それに気付かない内に。

無駄死にすんなよ。

ぎよつとして、老僧は足を止めた。

まるで、誰かが自分を支えていたかのような近さで、声が聞こえたのだ。

錯覚

だが、ちん、と澄んだ音を、僧は己の胸にはっきりと聞いた。懐を探った震える掌は、黒い独鈷を掴んでいた。

「ま、まさか、」

子供たちが、ようやく足を止めていた。何かを拾い上げ、輪になつてそれを囲みながら、きよろきよろと辺りを見回している。

「あれえ、れいげつさま、いなくなっちゃったよ」

「りんはあるのに」

「お母、お父、れいげつさま、どこにいきなさつただ？」

やっと追いついた大人たちに、子供達は不思議そうに尋ねる。もとより、親たちは答えられはしない。

「そんな、まさか」

「いくらなんでも、おらたちに追いついて来れる訳がねえ……」

子供たちは、思案顔の大人たちを放つて、大好きな老人の回りに集う。

「しょうにんさま、はい」

「しょうにんさまのりんでしょう？」

金銅の五鈷鈴。紛れもなく。

「う、嘘だ、いつのまに……」

呆然と、捨吉が来し方を振り返った。

「どうしただ、捨」

「お、尾根を、越しとる……こ、ここはもう、国境の峰ン中だ……」

「はあ、いつのまに」

「夢中で、子供ら、追っていたからのう」

灯が、ふいに彼らを照らした。

捕手？ あるいは鬼火か。

「坊様？ そこにおいでなのは、何時ぞやお会いした坊様ではないですか？」

「おお、そなた、木地師の」

一見して百姓でないとわかるみなりの男が、松明をかざして、こちらへやって来るところだった。皮の上着に裁つ着け袴、大鉈を腰にぶら下げている。

「上人様、こんな山のなかに、知り合いがいなさるかね」

おそるおそる、赤子を抱いた女が、老僧に耳打ちする。

「案ずるでない。お前たちの村にたどり着く以前に、世話になった方なのだよ」

「とんでもねえ、世話になったは、儂らのほうで。漆を採り損なつて沢に落ちてた儂を、将月様たちが助けてくだすったんじゃあないですか」

そういつて、木地師はさっきの子供たちのように、辺りを見回した。

「その将月様、どこにいきなさったかね？」

「はあ、将月様だ？ 何をいいなさるね、おまえさん」

「将月様が訪ねて来て、儂に教えてくだすったんだよ。おまえさんがたが、難儀してるとね。ついそこまで、先を歩いておられたのが、ふいとお姿が消えてしまって、」

いいも果てず、ざくりと音がして、かれらの足元に三鈷剣が突き立った。ひゃつ、と叫んで、木地師が腰を抜かす。

虚空から降ってきたとしか思えなかった。降りこぼれる、雪と共に。

「将月……麗月……清月よ……」

涸れることのない泉のように、老人の双眸は涙をこぼす。こんこんと、こんこんと。

「戻ってきたのか……よう、戻ってきたの……」

「上人様？」

「上人様、どうなされた？」

剣にすぎるように、老僧はうずくまる。その懷に、独鈷と、鈴を抱え。

「もはや離れまい。末永く、共に行こうぞ……」

それがいつの時代かは知らぬ。だが、伊豆より北の山中に、漂泊の民でもなしに、幕府の支配を受け付けぬ奇妙な集落があったらしい。上人と呼ばれた遊行者のもたらした真密（真言宗）を信仰した彼らには、さらに奇妙な伝承があった。

鬼が、彼らを守護していたというのだ。

曰く、上人が法具を供養し、ひとたび口訣を唱えれば、忽ち鬼の如き護法がたちあらわれ、危難より村人を救った、と。だが上人が入定した時、その鬼たちが上人の体をいずこかへ運び去り、以来、法具も消えてしまった、と。

その村も、今は無い。

村の裔も土地から離れ、真偽は、そうしてより大きな歴史の流れにのなかに消える。

上人の名前も、村の名前も、とうに失われた。

ただ、護法の宿る法具は、剣、鈴、独鈷であつたと、風土史には記されている。

追記

「それで？」

けだるく、男の吸うたばこの煙が部屋を漂っている。場末のホテルは防音設備ももろくに無く、横須賀港の汽笛が耳にうるさい。

「その鬼の一人が、俺様ってわけだ」

「ふうん」

「信じてないだろ、おめえ」

「信じるわよオ。ほんと、鬼みたいに絶倫だもん、清ちゃんは」
女の手が、シーツの下でどこぞかに動く。

「ほらあ、でつかい角」

「どこ握ってんだ、馬鹿！」

あとはお決まりのじゃれあいだ。

「でもさ、清ちゃんはいいつも自分のこと、お坊さんだつて言うくせに、鬼の生まれ変わりってヘンじゃない？ お坊さんと鬼って、仲悪そうよ」

「うるせえな」

煙草を吐き捨て、女にのしかかる一瞬、男の目がサイドテーブル

を見る。

黒い独鈷杵が、そこにあった。

了

結（後書き）

自サイトに掲載してある、某TRPGで作成したキャラクター背景として書いたたわいのない掌篇です。時代背景、宗教・習俗についての考証はされておりませんので、ツツコミ無用でひとつご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0941o/>

護法鬼奇談

2010年10月8日13時40分発行